

## 小諸義塾の英語教科書 —島崎藤村在任中を中心として—

鈴木昭一\*

### I. はじめに

小諸義塾は明治26年(1893年)11月木村熊二を塾長として開かれた。当初は生徒20名程度の私塾で、和漢、数学、英語を教えたという。英語は塾長が自ら教えていた。明治32年(1899年)に私立中学校としての認可を受けて3年間の教育を課すこととなり、4月から島崎藤村を国語・英語の教師として迎えた。明治35年(1902年)には義塾として隆盛期を迎え、4年制とした。しかし、諸般の事情から明治39年(1906年)3月には閉塾することとなった。小山太郎らの努力で誕生した義塾は、設立から13年目にしてその灯を消すこととなったのである。

藤村が小諸を去ったのは、閉塾の前年明治38年(1905年)の4月である。満6年余の小諸滞在であった。着任早々に結婚し、藤村は小諸で3人の女の子に恵まれている。作家としては、有名な「千曲川旅情の歌」や第4詩集『落梅集』の刊行という詩人としての業績がある一方、『旧主人』や後に『千曲川のスケッチ』に収められた作品など、小説家として自立する努力を重ね、『破戒』の完成を目指して上京したことはよく知られている。文学史的に見れば、藤村にとって小諸は詩人から小説家に脱皮する時期であった、と言えるだろう。

詩人・小説家として名を成した藤村は、小諸で

はまず教師であった。藤村がどんな英語の授業をしていたかは興味のあるところだが、これについてはほとんどわからない。しかし、幸いなことに当時使用された教科書が何冊か保管されている。それらの教科書を通してみると、明治30年代の英語教育の一端がうかがえる。英語の発音に対するカタカナ表記と和訳に当たっての構文上の理解不足について検討を試みたのが本稿である。期間は藤村在任中の明治32年(1899年)4月から明治38年(1905年)の3月までとした。

### II. 小諸義塾の状況

#### 1. 入塾生と卒業生の数

明治20年代の小諸には、高等小学校を卒業しても更にその上の教育を受ける学校はなかった。上田中学に行くか、東京に出るしかなかったのである<sup>1)</sup>。そういう状況下に誕生したのが小諸義塾である。こう説明する林 勇は「明治三十二年の改組以前の小諸義塾には卒業生というものはなかった。この時代は、教科書はあったが修業年限がなかったからだ。卒業生を出したのは明治三十二年度からで、閉塾となった明治三十八年度まで、六ヶ年間に三十六名が数えられる。これは義塾という学校の性質を物語るものである。例えば私の入学した明治三十三年四月には五十名程あった同級生が、二年生の時三十名足らずとなり、三学年に進級した者は三名に過ぎなかった。この事態は各学年にみられたのである」<sup>2)</sup>と切り切っている。

小諸義塾に入学はしたものの、途中で去って行く生徒が多かったことや、閉塾時にいくつかの資

\*〒380-8525 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学  
\*Nagano Prefectural College, 8-49-7 Miwa, Nagano 380-8525, Japan.

料が焼却されたという不幸な事情もあって、一体何人が塾生として入学し、あるいは退学し、卒業していったか、その数字は確定していない。「わが校舎に出入せし青年の既に千を以て数ふべきもの」<sup>9)</sup>と語る木村熊二の言葉は明治36年(1903年)に書かれた「小諸義塾基本金募集の趣意書」によるもので、義塾の意義を強調したための数字であろう。武重 薫は「十有三年間塾生となった人は千余人」<sup>10)</sup>と言い、林 勇も「義塾の門をくぐった者は一千人近いであろう」<sup>11)</sup>と書いているが、2人とも木村の「趣意書」を根拠にしたか、あるいは概数で言い表したものであろう。小諸義塾記念館に展示されている小諸商業高校の名簿では入塾生は577名である。懐古園の石垣に木村熊二のパネルを作成した、昭和11年(1936年)の調査<sup>12)</sup>では479名(女子学習舎31名の分も含む。)となっているから、それ以後補充された数字であろう。

藤村在任中(明治32年4月～38年3月)に限れば入塾生は328名で、卒業生はなんと32名に過ぎない。閉塾時の卒業生4名を加えても小諸義塾の卒業生は全部で36名という数字である<sup>13)</sup>。当時は小学校でも中学校でもかなりの退学者がいたようだから、私立という義塾の性格からしてこれもやむを得なかつただろう。「明治34年から野沢中学が出来たので、南佐久方面の同級生は義塾を去って行った」<sup>14)</sup>ということである。

## 2. 小諸義塾の英語教師

小諸義塾には実は4人の英語教師がいた。1人は藤村が着任するまで英語を教えていた木村熊二(明治26年11月～32年3月英語担当。明治32年4月以降は修身担当)である。地理・歴史担当の渡邊壽(明治33年4月～39年3月)も英語を担当していた。どの程度英語にかかわっていたかは不明だが、「舊小諸義塾職員名簿」<sup>15)</sup>の担当科目に英語も明記されているし、卒業生の平野英一郎と常田宗七も証言している。赤田五郎という先生が教え

ていたことも名簿に記載されている。しかし、門弟氏名にも同名の者が記録されている。林 勇の調査によれば、明治37年度卒業生の写真に先生として藤村と共に写っている<sup>16)</sup>とあるが、同年度経常費の記録に赤田五郎の名前はない。林 勇は明治35年以後の就任<sup>17)</sup>と考えているが、英語の補助者だったかもしれない。いずれにしろ、国語と英語の担当だった藤村が大多数の授業を担当していた、と考えて間違いはないだろう。

## 3. どんな英語の授業だったか?

藤村がどんな英語の授業をしていたか、興味のあるところだが、教え子の語ってくれるところは少ない。林 勇は「島崎先生の英語の授業について思い出すことが一つある。それは一年生の時のことである。先生はスペルの練習のため、BOY ボーイ、CAT キャットと、先に立って発音され、生徒がこれに従って斉唱するのであった。

ところが、小諸の小学校では高等科に英語の教科があり、ナショナル・リーダー巻二まで進んでいた。だが附近の農村の小学校にはそれがなかったため、英語に限り学力が不揃いであった。従って小諸出身の生徒には復習に過ぎないものであった。その上、生徒数からも半数を占めていた。そんな関係から、野生に富んだ少年達は、声を揃えて、しかも戯れ半分に、BOY ボーイ、とやったのだ」<sup>18)</sup>と藤村の授業風景を紹介している。

また別な箇所でも「スペルの練習などで、エー、エス、アズ/ビー、オー、ワイ、ボーイといった調子で発音練習をしたものだ」<sup>19)</sup>とも語っている。しかし、アズ(as)が1年生のレベルで登場することは考えられないし、ボーイ(boy)については両方で言及されているから、結局のところ、藤村の英語としてはboyとcatという2つの単語しか聞こえてこない。しかも、林 勇は英語の授業そのものについて語るというより、藤村が「声の譜」という本を引用して、騒がしい生徒たちを

間接的に戒めた、というエピソードを伝えたがっているのだから、英語そのものの授業風景を語る記述としては乏しい。

国語の授業について、藤村は「語句の解釈をしながら静かに読んで行く。小学校の時のように生徒に読ませるといことはなかった」<sup>14)</sup>ということである。こういう授業の進め方と「今になって思えば、近藤君は講義録で英語を勉強し、東京へ出て攻玉舎に入学し、鉄道の技師になった」<sup>15)</sup>という記述を重ねてみると、英語の授業も生徒に読ませるといふより、藤村自身が朗読して意味を取り、若干のコメントを付け加えて進めていったのではないかと推察できる。物静かだったという藤村が、声高らかに英語を読んでいる姿はどうも想像しにくい。

#### 4. 当てにならない生徒の記憶

生徒たちの記憶はどうも当てにならない。平野英一郎（明治34、35年頃卒業と本人の言）は「（島崎）先生は英語でもフランクリンの自叙傳とスマイルスのキャラクター」<sup>16)</sup>を受け持たれたと言う。常田宗七（明治34年入学～38年卒業）は「英語も程度の高い外国教科書を用ゐて、文法は原書を用ひ」<sup>17)</sup>と言っているが、現在保管されている教科書はすべて日本で出版されたものばかりである。竹澤正武（明治34年入学～38年卒業）は「英語なども三年ではブツシング・ツウ・ゼ・フロントを読ませられ、又文法はネスフィールドのイングリッシュ・グランマー第二巻」<sup>18)</sup>を読んだと言う。しかし「ブツシング・ツウ・ゼ・フロント」は保管されていないし、ネスフィールドの文法書は第三巻の勘違いかまたは印刷上の誤植かもしれない。林 勇<sup>19)</sup>の挙げている「ナショナル・リーダー」（長島文昌堂）は出版社が違いし、「スェンソン英文典（六合館）」という本は存在しない。「三年生のとき、土佐日記と英語文法を学んだ」<sup>20)</sup>と語る小林直衛（明治33年入学～36年卒業？）の

記述は信用できそうだが、英文法の教科書名が明らかでない。ここに挙げた教科書がいずれ見つかることを期待するしかない。

### III. 使用された教科書

#### 1. 教科書一覧

小諸藤村記念館と小諸義塾記念館に現在保管されている教科書は7種類、計8冊である。また、当時の英語の時間数は週6時間で、内容は[1学年 読方 綴方 習字][2学年 解釈 書取 会話][3学年 会話 作文 文法大意]となっていた<sup>21)</sup>。このことを踏まえて、教科書と使用学年を当てはめると以下のようになる、と推察できる。明治35年（1902年）からは4年生もいたと思われるが、様子がよくわからないので、ひとまず3学年までとし、教科書を当てはめてみる。

- ・1学年（読方）*Barnes' New National First Readers* B 6版、総頁数96頁、東崖堂、明治29年9月再版。林 勇（明治33年4月入学～34年10月退学）使用、hayashi isamiというサインがある。小諸藤村記念館所蔵。
  - ・同書、明治31年4月第3版。山浦俊助（明治34年4月入学 北佐久郡三都和字桐原村）使用、小諸義塾記念館所蔵。
  - ・1学年（読方）*First Primer* B 6版、総頁数185頁、齋藤秀三郎著、金港堂、明治30年4月文部省検定済、尋常中學校及高等小學校生徒用外國語教科書。渡辺忠雄（明治37年4月入学～38年4月退学）使用、小諸義塾記念館所蔵。
- 注) この教科書は *Barnes' New National First Readers* に代えて明治37年頃使われたか、英語の初心者用の教科書として使われたか、そのどちらかであろう。
- ・1学年（綴方 習字）*Revised Edition Elementary Spelling Book* Published by D. Appleton & CD. A 5版、総頁数176頁、戸田直秀発行人、明治20年発行。林 勇（明治33年4月入学

～34年10月退学)使用,小諸藤村記念館所蔵。

注)この本には小さな英語がびっしり詰まっている。いわゆる教科書というよりは英語のスペリングを練習するための問題集である。

- 2学年『ニューナショナル第二リーダー 獨案内』(Barnes' New National Reader No. 2 直譯意譯) B 6版, 総頁数319頁, 博言博士イーストレーキ先生・東京専門学校々友本多正先生共譯, 鐘美堂, 明治32年発行。山浦俊助(明治34年4月入学)使用, 小諸義塾記念館所蔵。

注)この本は正式な教科書ではなく『獨案内』であるが, リストに挙げておく。

Nesfieldの文法書の巻末に鐘美堂出版の一覧表が掲載されている。それによると文法書のシリーズやBarnesのNew National Readersを教科書として出版しながら, 同時に生徒の自習書, いわゆる虎の巻も出版していた。Barnesの教科書は人気があったらしく, 東崖堂と六合館も同じ教科書を出版している。

- 2学年(書取) Revised Edition *Elementary Spelling Book* (1学年の継続)
- 2学年(会話) *Practical and Prompt Method to Study English Japanese Conversation* 『實用速成 英和會話』 A 5版, 総頁数285+42頁, 島田 豊著, 海軍大学校教授ロッド先生閱, 小川尚榮堂, 明治29年初版, 明治32年増補13版。山浦俊助(明治34年4月入学)使用, 小諸義塾記念館所蔵。

注)この本には実用的な英単語と英語表現がびっしり詰まっている。3年間で13版に及んでいるのはかなり売れたものと推定できる。この本についても後で詳しく言及するつもりである。

- 3学年(授業内容には該当しないが, ひとまず3学年とした。) *Barnes' New National Third*

*Reader* B 6版, 総頁数240頁, 六合館, 明治25年第3版。唐澤政知(明治33年入学)使用, 小諸藤村記念館所蔵。

- 3学年(会話 作文) *Practical and Prompt Method to Study English Japanese Conversation* 『實用速成 英和會話』(2学年の継続)
- 3学年(文法大意) *English Grammar Series Book III Idiom and Grammar for Middle Schools* by J.C.Nesfield, M.A. B 6版, 総頁数400頁, 鐘美堂, 明治22年初版, 明治34年10月第6版。唐澤政知(明治33年入学)使用, 小諸藤村記念館所蔵。

## 2. 教科書の特徴と勉強の跡

- *First Primer*

アルファベットから導入し, つづいて

Lesson I. an. This ia a man.

Lesson II. at. What is this? It is a cat. (下線部鈴木。以下同じ) 式に展開してあって, 分かりやすい教科書である。最後の Lesson LV. 「ロバの話」は教訓話である。

His master came and said, "Why did you refuse to do what you were told? The rule is—'Those who will not work shall not eat.'"

After that he never refused to do what he was told. (p. 85)

注)教科書としては易しいが, 渡辺忠雄の勉強した形跡がうかがえる。51頁上の方に「以上前期」という記入がある。

- *New National First Reader*

Part I (pp. 7~70)

Lesson I. It is a dog.

が最初に登場するのは特に問題ではないが,

Lesson II. See the boy and the dog.

The boy and the dog run.

Lesson V. The big cat is at the nest.

Will the cat get an egg?

See the hen run at the cat!

Run, hen, run. (p. 11)

と続くのはいかなものだろう。話の内容に重点が置かれているとはいえ、下線部の構造は初心者には難しすぎる。以下、構造上気になる箇所を下線を引いておく。

☆ Lesson XXI. The Kitty was too small to catch the rat. (p. 27)

☆ Lesson XXIX. See the big apples we have! (p. 35)

Part II (pp. 72~95)

☆ Lesson VIII. The eagle is a large and strong bird. Mamma' saw one take up a rabbit and fly off with it.

I wish we could catch one, Frank.

How funny it would look in a cage!

Yes, sister, but you would have to get a much larger cage than the one your red-birds have. (p. 86)

☆ Lesson IX. The waves dashed over the side of the boat, but the more they dashed, the more fun it was for Frank.

When Frank got to be a man, he was so fond of the water that he went to sea in a large ship.

He learned how to sail the ship, and after a while, he was made captain of it. (p. 90)

• *Practical and Prompt Method to Study English Japanese Conversation*

☆ How do you do, sir?

御きげんようあつしやいますか。

☆ 一喫 (プク) お飲みなさいまし。

Will you take a smoke?

☆ よっぽど別 (ベツ) 嬢 (ピン) です。

She is an uncommonly pretty girl.

などは読んでいて面白い。ただし、この実用本がどの程度教科書として使われたかは必ずしも

判明しない。というのは、総頁数327頁のうち Entrance/Door-way, Veranda, Inlet, Shelf, Gate, Fence (pp. 34, 35) の6箇所印がしてあるだけである。

• *New National Third Reader*

☆ Sunday など曜日の練習 (p. 35) や January など月の練習 (p. 47) がこの教科書 (巻三) で登場するのはいかにも遅い。その反面、所々に易しい詩が挿入されているのは好感がもてる。例えば 'November' の最初はこんなふうになっている。

The leaves are fading and falling,

The winds are rough and wild,

The birds have ceased their callings,

But let me tell you, my child. (p. 155)

☆ 所々に教訓がちりばめられている。例えば、

True ease in writing comes from art, not chance. (p. 11) (Pope からの引用)

Never put off till to-morrow that which you can do today. (p. 42)

He that is good at making excuses, is seldom good for any thing else. (p. 130)

☆ 唐澤政知の勉強の跡をたどってみれば、

1) I told you before 'twas (it was と本人記入) a stormy night when these little kittens began to fight. (p. 37)

2) One day the gentleman went out to see what the elephant and the children were  
四 一 二 三 六  
doing. (p. 74)

五 (番号は本人記入)

3) Lesson VIII. 'Jack and Looking-glass' (Jack = monkey) は愉快な話である。

This was a new thing to Jack. He turned it over and over in his hands, and soon saw what he thought was another monkey looking at him; but it was really

his own face which he saw in the glass.  
 注) 下線部のoの中を黒く塗ってある。中学生くらいの生徒がいかにもやりそうなことで微笑ましい。

・ *Idiom and Grammar for Middle Schools*

この本は品詞と構文について説明した文法書である。Lesson I. General Definition, Lesson II. Nouns, Lesson III. Adjectives とつづいて Lesson IV. Pronouns の途中92頁の所に乗代わりのひもが挟まっていて、勉強した形跡がある。しかし、そこから後は教科書もきれいで、勉強した形跡は見られない。

☆唐澤政知の勉強の跡をたどってみれば、

1) Reflexive Personal Pronouns (反省人称代名詞と記入。再帰代名詞のこと) (p. 87)

2) 練習問題

(a) I told Ram that the snake seen by Ram (→ him) in the garden would do Ram (→ him) no harm, if Ram (→ he) left the snake (→ 記入なし) alone to go the snake's (→ its) own way.

(f) The bees are flying towards the flowers. The bees (→ they) suck the flowers (→ 記入なし), and fill the bees' (→ there: theirの間違い) bags with honey.

IV. 英語のカタカナ表記

*Barnes' New National Second Reader* 『獨案内』(以下 R. と略記) と *Practical and Prompt Method to Study English Japanese Conversation* 『實用速成英和會話』(以下 P. と略記) の2冊は、英語の発音をカタカナで表記してある。英語の中には日本語に存在しない発音が含まれているのだから、当然のことながら100%カタカナで表記することは不可能である。例えば thing は [スィン]

と書くしかないし、reading と leading も [リーディング] と表記せざるをえない。そういうことは前提とした上で、それでも気になるカタカナ表記について、以下考察しておきたい。

一読してまず気になるのは [ツー] (to) と [ドゥー] (do) が頻繁に登場することである。[t] [d] の扱いに困ってのことであろう。Garden の発音は [ガードン/ガードェン/ガードゥン/ガーツン] と4種類の表記が見られる。曖昧母音の [ə:] の表記にはよくよく困ったのだろう。First の発音は [フースト/フォルスト/フワスト/フワースト] (R.), [フースト/フォスト/フォースト] (P.) の7種類がある。Fasten [ファズン], fear [フイーア], fight [フワイト], feel [フヒール], find [フワインド], fun [フワン] など [f] の表記には苦勞のあとがみられる。[r] の扱いにも困ったようである。Walk, work, woke が共に [ウォーク/ウォーク] と書かれ、warm, worm が [ウォーム/ウォーム] と書かれていては、もはや発音上の区別は不可能といえよう。

中には climbs [クリソプス], exercise [エキザサイズ], praise [プライス], through [スプー] など誤解に基づくものもある。Lettuce など [レッチュウス] という表記で発音できるのだろうか。カタカナ表記とはっきり違うという意味で (lettis) と付け加えてはあるが。P. に出てきた woman [ウイマン], women [ウイメン] の表記はうまいと思う。

私の考察はこれ位にして、以下一覽しておく。2冊の本に共通している発音とそうでない発音を区別して整理しようとしたが、見にくいので教科書毎にまとめた。単語の順序はアルファベット順を原則としたが、発音上並列した方が分かりやすい単語はそれにこだわらないこととした。なお、明らかな誤植と思われるものは除外してある。

1. 二重母音は伸ばして (注1)

R. baby ベービー/ベビイ/ベビー cage ケーチ cake ケーケ  
 came ケーム cave ケーヴ face フェース/フエース  
 gave ゲーブ lady レーデー/レデー lazy レーゾイ

make メーク May/may メー paste ペースト  
 place プレース same セーム save セーブ shame  
 シューム stay ステイ (注2) take テーク tame  
 テーム wake ウェーク borrow バーロー break  
 ブリーク breasts ブリースト brown ブロウン captain  
 キャピテン cold コールド eight エート know ノー  
 pleasant プリーザント sail セール/セイル stairs  
 スターース tail テール told トールド

P. age エージ April エープリル baby ベビー face  
 フェース hail ヘル lady レディー later レター  
 lay レー May メー native ネーチヴ paper  
 ペーパー patent ペーテント pay ペー play プレー  
 race レース eight エート mountain マウンテン  
 rain レーン rainy season レーニ シーズン toast  
 トースト train トレーン twenty トゥエンティー wait  
 ウェイト waiting ウェーチング

注1) 島岡 丘(たかし)によると「日本語には『エイ』  
 と『エー』また『オー』と『オー』との対立が  
 ない」<sup>22)</sup>ということだから、二重母音が「ベビー」  
 のように伸ばして表記されるのは当然だとい  
 えよう。

注2) stay だけが [ステー] ではなくて [ステイ] と表  
 記されている。

2. [ə:] には苦勞のあと

R. birds バールズ/バーズ  
 first ファースト/フォルスト/フラスト/フワースト  
 words ウォルツ/ウオーヴ (wurds)  
 work ウォーク/ウオルク (wurk) work = wurk \*  
 註として「\* wurkハworkノ発音ヲ示スモノナリ」(p. 9) とある。  
 world ウォールド/ウオールド (wurld)  
 worth ウルス/ウオース (wurth)  
 P. bird ボード birds バアツ/ボアツ  
 early オーリー  
 first ファースト/フォースト/フォースト  
 word ウォード work ウォーク world ウォールド  
 worst ウォースト

3. “d” は [ジ] [ヂ] [ヅ]  
 R. do ヴー did チッド done ダーン doing ヴーイング dry  
 ヴライ hidden ヒツツウン leading リーヂング/リーディング  
 (注3)

P. danger デジャー (デンジャーの誤植か) dangerous ダンジラス  
 deal デール dealer デエラー devil チカイル/チヴル dew  
 シュー dictation シクテーション difficult シフィカルト  
 directly シレクトリー director シレクトー disagree  
 ジスアグリー distance ジスタンス disappears ジスアッペヤス  
 disappointing デイスアッポインチング (注4) distress  
 チストレッツ division シヴィジョン divine チヴィン do ヴー  
 did シッド didn't シドント doing ヴーイング doors  
 ヴーワズ dry ドライ (注5) due シュー duty チューチ/  
 デューテ dwelling ドゥエリング (注6) addition アジション  
 immediately インメジュートリ splendid スプレシッド

注3) leading については [リーチング] (p. 270) の他  
 に [リーディング] (p. 276) という表記が見られる。  
 [ディ] という表記法がしっかり意識されていれ  
 ば、did は [チッド] ではなくて [ディド] になり得  
 たはずである。

注4) ここにも [ディ] が使われている。(p. 239)

注5) [ドライ] と表記してあるのはむしろ例外的で  
 ある。島岡 丘は [チュアィ]<sup>23)</sup>と表記している。

注6) [ドゥ] という表記はここにしか見られないが、  
 [ダヂツデド] だけでなく [ダディドゥデド] による表記  
 がありえたことを物語っている。

4. “ed” はまず [ド]

R. asked アスクド brushed ブラッシュド (brusht)  
 continued コンチニュード helped ヘルプド (helpt)  
 hopped ホップド jumped シャムプド kissed キツド  
 (kist) laughed ラッフド liked ライクド (likt)  
 looked ルックド missed ミスト (mist) passed  
 パッスド (past) seemed シームド walked ウォークト  
 (wakt) washed ウォッシュド wished ウィッシュド  
 (wisht) wondered ウォンダード

P. allowed アラウド noticed ノーチスド

注7) P. ではすべて [ド] が使われている。R. で

は“~ed”が[t]と発音される場合、括弧の中のような表記をしてあることもある。しかし、大部分日本語表記が[ド]になっているから、生徒はそれに引っ張られるであろう。

### 5. “r”の音は響かせて [ル]

- R. are アール were ウェア/ウェア-ア/ウェアヤ  
board ボールド doctor ドクトル floor フルーア  
poured ポールド
- P. are アー were ウェア/ウェアヤ board ボールド  
course コールス/コルズ journal ジョーナル No.  
(= number) ノンブル sort ソールト

### 6. ~orの場合

- R. doctor ドクトル
- P. doctor ドクター actor アクター director ディレクター  
sailor セイロー tailor テーロー

### 7. “s”と“sh”はどちらも「シ」「セ」

- R. say セー/セイ says セーズ(sez) said セッド/シエッド  
seal シール sea シー sea-shore シーショア see  
シー seed シード seen シーン sick シック since  
シンス sister シスター sing シング sheep シープ/  
シキープ ship シップ shall シアル/シャール shawl  
ショール shell セル (なぜ[セル]なのか?)
- P. sea シー see シー season シーズン shell シェル  
shower シオワー since シンス easily イージー

### 8. “t”は「チ」か「ツ」

- R. tea チー teacher チーチャー tears チーアズ  
teeth チース tooth ツース till チル tinkle チンクル  
to ツー too ツー to-day ツーデー to-morrow  
ツモロー tonight ツーナイト took ツック tree ツリー  
treat ツリート true ツル-ツルユ(注8) truth  
ツルース try ツライ/トライ trying ツライング/トライング  
(注9) twelve ツウエルヴ beautiful ビューチフル/  
ビューティフル (注10) into イントゥー sticks スチックス

still スチル sting スチング until アンチル stood  
スツッド/スツード understood アンダースツード eating  
イーチング hunting ハンチング putting プッチング  
shouting シヤウチング city シチイ mighty マイチイ  
naughty ノーチイ party パーチイ plenty プレンチイ  
pretty プリチー/プレッチー

P. tea チー/ティー/ティー tea-house チーハウス black  
tea ブラックティー green tea グリーンティー (注11)  
teacher チーチャー teacher's room チーチャーズルーム  
teaching テーチング (注12) teeth テース tooth  
ツース thirsty ツォースチ ticket チケット (注13)  
to ツー to-day ツデー train トレーン tree トリー  
triumph トライアンプ true トルー try トライ  
twenty トウエンティー two ツー beauty ビューティー  
calamity カラミチー citizen シチズン continue  
コンチニュー intimate インチメート latitude ラチチュード  
lettuce レッチュウス nightingale ナイチンゲル  
plenty プレンティー satisfy サチスファイ steamer  
スチーマー still スチル together ツゲザー tunnel  
タンネル

注8) 島岡 丘によると「tr-, dr-はそれぞれ『チュ』、『ヂュ』で表すと英語音に近くなる」ということであり、trueを[チュウー]<sup>24)</sup>と表記している。また『ヴィスタ英和辞典』は[ツル-]<sup>25)</sup>としている。

注9) tryおよびtryingは大体[ツライ][ツライング]だが、[トライ](p.134)[トライング](p.130, p.144)という表記もある。島岡 丘によると[チュアィ]<sup>26)</sup>、『ヴィスタ英和辞典』によると[ツラーイ]と表記されている。

注10) beautifulについては、本文の中では[ビューチフル](p.290)となっているが、新出語の紹介時には[ビューティフル](p.288)である。[トライ]にしても[ビューティフル]にしても、無意識のうちにそう表記させたのだから、教科書全体に及んでいないのは惜まれる。

注11) [ブラックティー]や[グリーンティー]という表記があるのに、[チーハウス]と矛盾する。

注12) [テーチング](teaching)や[ティー](tea)とい



う表記があるのに, [チーチャーズルム] というのは残念である。そうは言っても, Team Teaching を [チームティーチング] (TT) と書いて平気である (信濃毎日新聞 1998年10月2日付) のも確かである。

注13) [チケット] は日本語にすっかり定着している。『ヴィスタ英和辞典』は [ティケト] という表記だが, 酒井邦秀は「[テケツ]の方が原音に近いと思います」<sup>27)</sup>と書いている。

9. 同じ [子音+子音] は [ッ] または [ン]
- R. funny ファンニー/フリンニー glass/grass グラス  
happy ハッピー/ハッピー letter レッター little  
リトル/リトル summer サマー-(R.)/サマー-(P.)  
running ランニング Bunny バニー
- P. happen ハップン happy ハッピー letter レッター  
manner マナー

10. その他気になる表記

1) 単語

- R. Jane ジェン/ゼン/ゼーン
- P. objection オブゼクション allow アロー brought  
ブライウト through スロー carry カリー cat カット  
(cutと間違えないか?) clerk クローク firm フォーム  
(formとの区別は?) theatre セーター telephone  
テレフォン (現在使われているテレホンカードよりこの方がいい。)  
general ジェネラル (今でも使われているか) generation  
ゼネレーション month モンス money モニー cash  
カッシ capital カピタル character カラクター  
borrow バロー (R. の sorrow サロー, saw サウと同様うまい  
と言うべきか)

2) カタカナ読みで通じるか (P.)

- How do you do, sir? ハウヅーユーヅーサー (p. 71)

注14) 島岡 丘によれば ハウダユドウ<sup>28)</sup>

- Dinner is ready. ジンナーイズレデー (p. 84)
- Summer is coming.  
サンマーイズコンミング (p. 118)
- Come and take tea with us.

カムアソドテークテーウイズアズ  
宅へいらしやつて茶をお飲みなさいまし (p. 89)。

注15) us が is の発音に引っ張られて [アズ] になってしまっている。

- He comes. ヒーコムズ (p. 141)
  - Sit down. シットダウン (p. 148)
- 3) うまい表記 (P.)
- Here is ... ヒアズ (p. 151)
  - Here is Mr.... ヒアズミスター (p. 102)
  - as I can アズアイケン (p. 101)
  - as soon as アズサンアズ (p. 125)
- cf. soon スーン (p. 135)

V. 構文上の問題点

1. *First Primer* を見ると, 漢文の書き下し文式に和訳の順序を記入して勉強した, と思われる箇所が所々に見受けられる。その中でも英語理解の上で気になるところを取り上げておく。

1-1. See the dog run at the rat! (p. 14)

5 4 3 2 1

鼠を目がけて走る犬を見よ。(鈴木訳)

1-2. One fine day Tom and I went to see the

1 2 3 4 5 6 12 11 10

men make hay. (p. 33)

9 8 7

ある晴れた日にトムと私は干し草を作る人々を見るべく行った。(同上)

注1) 1-1, 1-2共に [see+目的語+原型不定詞] の構文だが, 番号の付け方を見ると, 原型不定詞が目的格補語としてでなく, 修飾語として扱われている。

2-1. Have you ever seen wheat growing in the

8 1 2 7 6 5 4

field? (p. 43)

君はかつて田畑に育っている小麦を見たことがありますか。(同上)

注2) ここでも growing という現在分詞は目的格補語としてではなく、修飾語として扱われている。

3-1. I ran after the fox to kill him, but

1 6 5 4 3 2 7

the fox ran so fast that I lost him in

8 16 14 15 13 9 12 11 10

the wood. (p. 24)

私ハ彼ヲコロスベク狐ヲツケテ走りシナレド狐ハ私ガ森ノ中ニ彼ヲ失フ程左様速ニ走りシ。(渡辺忠雄の記入から合成)

注3) 「結果」として扱われるべき so~that の構文が「目的」として処理されている。

2. Barnes' New National Reader No. 2 『獨案内』についても見ておこう。

1-3. I saw the other boys laugh. (p. 103)

私ハ見シ 他ノ 子供等ヲ笑フ

1 5 3 4 2

1-4. Ned heard Rover bark. (p. 77)

一ハ 聞ク 一ガ 吠エルヲ

1 4 2 3

1-5. I like to see Tab drink milk. (p. 110)

私ハ好ムベク見ル 一ガ 飲ムヲ 乳ヲ

1 7 6 5 2 4 3

注4) 1-3では先の1-1, 1-2と同様の扱いである。しかし、1-4, 1-5のように目的語が固有名詞の場合には意味上の主語として扱っている。解釈が一定していない。

2-2. I ran after him, and found him trying

私ハ走りキ後ニ 彼ノ 面ヲ洗フ 彼ヲ 試ムル

1 4 3 2 5 12 11 10

to wash his face. (p. 24)

ト 洗フ 彼ノ 面ヲ

9 8 6 7

2-3. Let any one of you, who sees another

トコロノ 視ル 他ノ

7 6 4

boy looking off his book, come and tell

子供ヲ [側視スルトコロノ] 彼ノ 書物ヲ

5 3 1 2

me. (p. 101)

注5) 2-2, 2-3では2-1と同様、現在分詞が目的格補語としてではなく、修飾語として扱われている。

2-4. Not very long after I saw Fred looking

私ハ見シ 一ガ [側視スル] ヲ

5 10 6 9

off his book. (p. 102)

彼ノ 書物ヲ

7 8

2-5. It looked very funny to see the eleven

ソレハ見ヘタ 甚ダ 面白ク 一ハ 見ル 十一ノ

1 11 9 10 8 7 2

dogs swimming in the water. (p. 172)

犬ガ 泳グヲ 中ヲ水ノ

3 6 5 4

注6) 2-4では目的語として固有名詞がきているので、1-4, 1-5の原型不定詞の場合と同様、現在分詞を目的格補語として扱っている。2-5の場合は固有名詞ではないが、目的格補語として扱っている。

以上のような理解の仕方を考えてみると、[感覚動詞+目的語+原型不定詞/現在分詞]の解釈が一定していないことが読み取れる。

2-6. We could now see the deer and the dogs

我々が能フタ 今 見 鹿ト 面シテ 犬ヲ

12 21 13 20 17 18 19

running after them. (p. 155)

走ルトコロノ 追フテ 彼ヲヲ

16 15 14

注7) running という現在分詞が the deer も修飾していると考えたために、鹿が鹿を追いかけると

いう奇妙な解釈がなされている。

3-2. He run (ranの誤植) so fast that he fell  
 彼ハ 走りキ 左様ニ速ニ 7ホド 彼ガ [倒レシ]  
 1 9(7の誤植) 5 6 4 2 3  
 down. (p. 25)

注8) 3-1と同様「結果」としてではなく「目的」として扱われている。

4. Ships have to sail a long, long time  
 船ハ モツ バク帆走ル 長キ 長キ 間  
 9 20 19 18 15 16 17  
 before they get to us. (p. 83)

前ニ 彼等ガ 得ラルム迄我々ニ  
 14 10 13 12 11

注9) have to の意識が全くない。「船ハ……帆走ルバクモツ」とは一体どういう意味なのだろう。

## VI. おわりに

平成10年(1998年)9月26日に小諸市で島崎藤村全国大会が開催された。それを機に、藤村は小諸義塾においていかなる英語教師であったか、を調べてみようと思った。小諸に何度も足を運んだ。しかし、英語教師としての藤村の姿は必ずしも鮮明には浮かび上がってこなかった。その代わり、保管されている当時の教科書を一頁一頁と繙いてゆくうちに、小諸義塾に学んだ生徒たちの書き込みを見つれたり、英語の発音についてのカタカナ表記に気が付いた。そこで、当時の教科書について整理してみたという訳である。

藤村記念館館長の白石孝雄氏、市立小諸図書館の清水隆夫氏、小諸市教育委員会の小山文登氏には色々と便宜を図っていただいた。とりわけ、小諸義塾記念館の饗場陽子さんには格別お世話になった。時折流れてくる「惜別之歌」のメロディーを耳にしながら、小諸義塾の教室で当時の教科書を読ませていただいたことは忘れられない。記して心からお礼を申し上げたい。

(注)

- 1) 林 勇著『島崎藤村―追憶の小諸義塾―』冬至書房新社, 昭和52年, 26頁。
- 2) 同書, 50, 51頁。
- 3) 林 勇編著『私立小諸義塾沿革誌』小諸義塾沿革誌刊行会, 昭和41年, 79頁。
- 4) 武重 薫著『藤村の小諸時代』本人発行, 昭和22年初版, 昭和46年3版, 57頁。
- 5) 林 勇著, 前掲書1), 51頁。
- 6) 小山周次編『小諸義塾と木村熊二先生』竹澤正武発行, 昭和11年, 限定250部, 93~106頁。
- 7) 林 勇編著, 前掲書3), 96頁。
- 8) 林 勇著, 前掲書1), 80頁。
- 9) 小山周次編, 前掲書6), 92頁。
- 10) 林 勇編著, 前掲書3), 98頁。
- 11) 同書, 61頁。
- 12) 林 勇著, 前掲書1), 78, 79頁。
- 13) 林 勇著『小諸なる古城のほとり―島崎藤村と小諸―』小諸市立藤村記念館発行, 昭和42年, 17頁。
- 14) 林 勇著, 同書, 16頁。
- 15) 林 勇編著, 前掲書1), 80頁。
- 16) 小山周次編, 前掲書6), 114頁。
- 17) 同書, 121頁。
- 18) 同書, 126頁。
- 19) 林 勇編著, 前掲書3), 62頁。
- 20) 田中富次郎著『島崎藤村II―【破戒】・その前後―』桜楓社, 昭和52年, 83頁。
- 21) 小山周次編, 前掲書6), 87頁及び林 勇編著, 前掲書3), 48頁。
- 22) 島岡 丘(たかし)著『中間言語の音声学―英語の「近似カナ表記システム」の確立と活用―』小学館プロダクション, 平成6年, 79頁。
- 23) 同書, 12頁。
- 24) 同書, 128, 129頁。
- 25) 若林俊輔編『ヴィスタ英和辞典』三省堂, 1998年, 1551頁(以下省略)。
- 26) 島岡 丘著, 前掲書, 12頁。
- 27) 酒井邦秀著『どうして英語が使えない?』ちくま学芸文庫, 1996年, 83頁。
- 28) 島岡 丘著, 前掲書, 145頁。